

月の裏側 日本文化への視角

クロード・レヴィ＝ストロース
川田順造訳



2015年10月10日
丸山 明久

問題意識

- 日本人は“日本人らしく”生きる時に輝きを放つ。
- 「自分たちは何者か？」知らずしてグローバルは語れない。
(2015年5月9日の常盤塾より)

自分たちは何者か？

このヒント

- ・日本人以外から日本人を見る
- ・欧米的“知”の基準からだけで、日本人を見ない
- ・構造的に、全体的に、日本人を見る



レヴィ＝ストロースの日本人観

クロード・レヴィ＝ストロース



- ✓ 構造主義の哲学者、社会人類学者、民族学者
- ✓ 世界を西洋中心主義で見ようとする欧州に対して、世界は“**構造的**”に、“**全体的**”にみないとダメと反論。
- ✓ 第三世界(発展途上国、未開社会)と呼び捨て、未開社会は野蛮・原始的と言うことに対し、彼らには“**野生**”の**思考**があると主張。
- ✓ 「欧州的“知”が如何に世界をダメにしているか」を問い続けた。

- 1977年～88年、5回、日本を訪れている。
- 日本に対する愛着大(幼少期から日本の浮世絵の虜。知的、精神的形成に早くから影響を受ける)
- 人類学者として日本を眺める→印象を講演会等で語る。

月の裏側

- ✓ 本書は、1979～2001年の間にレヴィ＝ストロースにより書かれた多様な文章を集めたもの
 - 世界における日本文化の位置(国際日本文化研究センター公開講演会)
 - 月の隠れた面(パリ開催シンポジウム「フランスにおける日本研究」)
 - 因幡の白兔(アメリカ大陸に存在する因幡の白兔の物語の異本に関する覚書)
 - シナ海のヘロドトス
 - 仙厓 世界を甘受する芸術
 - 異様を手なずける(ルイス・フロイス執筆 本の序文)
 - アメノウズメの淫らな踊り(『猿田彦大神フォーラム年報』四号)
 - 知られざる東京(『悲しき熱帯』最新の日本語版のための序文)
 - 川田順造との対話(NHK番組のためにパリで収録された対談)

- ✓ これらの文章の多様さを貫いて、日本人に対する、共感に充ちた視線が浮かび上がる(P9)

- ✓ 月の
 - 目に見える側－エジプト、ギリシャ、ローマ以来の旧世界の歴史
 - 隠れた側－日本、アメリカ学者の領分(P57)

レヴィ=ストロースの日本観察

- ① 縄文土器に見る日本の根源
- ② 言語から道具に見る主体の「求心」性
- ③ 美術、料理に見る「混ぜ合わさない」文化
- ④ 日本精神を構成する「遊び」への嗜好
- ⑤ 日本人の労働観
- ⑥ 日本人の人間性
- ⑦ 日本文明の特徴

①縄文土器に見る日本の根源

日本の美意識の変わることのない特徴は、「縄文精神」によるものかも知れない。

・『縄文中期の「火焰様式」とでも呼ぶべき土器において、見る者の心をとらえずにおかない表現に到達しています。「構成がしばしば非対称」とか「あたりかまわぬフォルム」とか「ぎざぎざ、突起、瘤、渦巻き、植物的な曲線がからみ合う造形装飾」といった表現をきくと、五、六千年前に「アール・ヌーボー」が生まれていたような気持ちになります。』

(pp.25-26)

・『縄文文明は、人類における最古の土器を創り出しただけでなく、それが極めて**独創的**な感覚によるものなので、世界のどこでもこれに比肩しうる、いかなる種類の土器も見出すことができないのです。縄文文明と比較できるものは、皆無です。ですからそこに、**根源での日本の特殊性の証**があると、私は言いたいのです。』(P147)



火焰土器



火焰型土器の部位の名称(小熊2003)

火焰型土器の最大の特徴

口縁部に付く鶏冠状把手と鋸齒状突起、そして、原則として縄文を使用せず、隆線文と沈線文によって施された浮彫的な文様である。

これらの文様により、頸部と胴部上半部にはS字状隆線文および渦巻状隆線文、胴部下半部には逆U字状隆線文が描かれている。そのほか、鶏冠状把手の間には袋状突起、鶏冠状把手の下には眼鏡状突起が付けられている。

②主体の「求心」性

話し言葉、工芸技術、政治思想といった極めて多様な分野で、自分に戻る(求心)という驚くべき能力が発揮されている。

・『主体に対して西洋哲学は遠心的です。すべてが、そこから発します。日本的思考が主体を思い描くやり方は、むしろ求心的であるように思われます。日本語の統辞法が、一般的なものから特殊なものへ限定することによって文章を構成するのと同じく、日本人の思考は主体を最後に起きます。』(P38)

・『中国生まれの汎用鋸やささまざまな型の鉋にしても、六、七世紀に日本に取り入れられると、使い方が逆になりました。職人は、道具を前に向かって押すかわりに自分の方へ引くのです。』(PP.38-39)

・『工芸家たちが、鋸や鉋を私たちがやるのとは逆方向に、遠くから近くへ、対象から主体へ向かって使うという事実に驚きました』(P56)

・『明治時代の初めに、日本が西洋と対等になろうとしたのは、西洋に同化するためではなく、西洋から自分をよりよく守るための手段を見出すためだった』(P56)

③「混ぜ合わさない」文化

日本の美術、音楽、料理は、混ぜ合わせることを拒否し、基本的な要素を強調する。

・『ディヴィジヨニズム(純粋な色調を並置する絵画の技法を指して用いられる言葉)の実例を、日本文化の極めて多様な領域に見出します。料理では、自然の産物を**そのままの状態**に置き、中華料理やフランス料理とは反対に、素材や味を**混ぜ合わせることを避け**ますし、大和絵においても、**描線と色を切り離し**、色は平面的に塗られます。日本音楽においてもそうです』(P30)

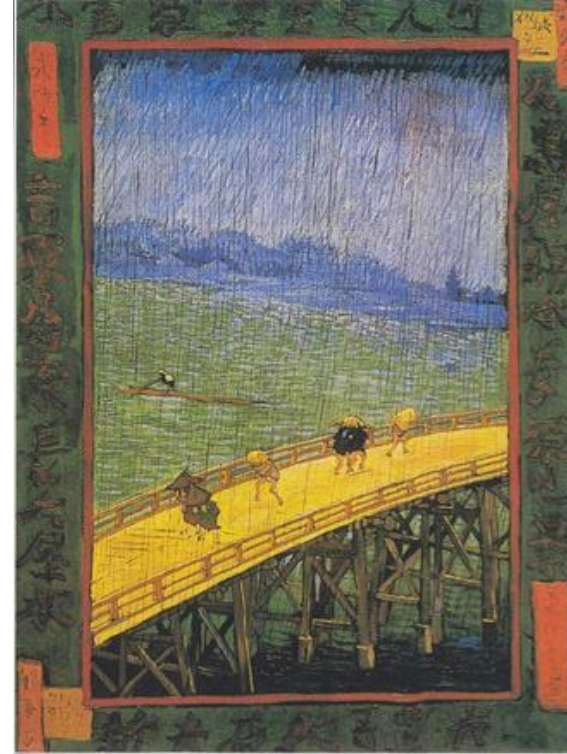
・『線描と色彩とが独立していること、つまり表現力豊かな線と平面的に塗られた色彩が特徴です。この独立性すなわちデッサンと色彩が互いに依存していない特性が、印象派の画家たちを熱狂させました。』(P53)

・『浮世絵において私を魅惑し続けてきたもの、さらに一般に「大和絵」と呼ばれるものの中にもあるもの、つまり、**色彩を純粋な状態に保ち、線描と彩色とを区別**する配慮です。それは、私たちの料理や私たちの絵画が、全体の総合を試みているものの構成要素への、こう言ってよければ、ある種の解体を適用することです。』(P140)

ジャポニズム



歌川広重・名所江戸百景
「大はしあたけの夕立」



ゴッホ「ジャポネズリー: 雨の橋」
1887年9月-10月、パリ

④「遊び」への嗜好

日本人は遊びをととても大切にしている。この遊びへの嗜好に日本精神を構成している要素の一つを見る。

・『しばしば、日本で私は、ひどく真面目そうな銀行家や実業家までが、たわいない玩具に魅了されていることに驚いた。ヨーロッパで同じような立場の人は、そういうものに無関心か、無関心を装うだろう。』(P92)

・『グラフィック・アートの領域で、この**遊びへの嗜好**は極めて早い時代、十二世紀の画家でもあった僧侶鳥羽僧正〔作ともいわれる〕の有名な絵巻〔鳥獣人物戯画〕に現れている。』(P92)



⑤日本の労働観

日本人の労働観は、人間と自然のコミュニケーションの一形態を表したものである。そこには詩的価値さえ有している。

・『私の大部分の時間は、機織師、染師、絵師、陶芸師、鍛冶師、木地師、金細工師、漆芸師、木工師、漁師、杜氏、板前、菓子杜氏、それに文楽の人形遣いや邦楽の奏者の方々とお会いすることに割られました。そこから私は、「はたらく」ということを日本人がどのように考えているかについて、貴重な教示を得ました。それは西洋式の、生命のない物質への人間のはたらきかけではなく、人間と自然のあいだにある親密な関係の具体化だということです。』(P125)

・『労働者とその道具とのあいだにどのような形の結びつきを作っているかを調べることも重要です(吉田光邦教授が、日本の職人が自分の使う道具に対して、人に向けるような愛着を持つことがあるとおっしゃっていたのを思い出します)。』(P45)

・『ある種の能の演目でのように、ごく日常的な仕事に詩的価値を付与することによって、それらを顕彰しています(「詩的」という言葉のギリシャ語の[「作る」ことを意味した]語源と、芸術的意味とを一致させています)。』(P125)



補足)日本の労働観

日本での講演録『構造・神話・労働』(大橋保夫編、三好郁朗ほか訳、みすず書房)でレヴィ=ストロースは、杜氏や刀鍛冶など日本の職人たちの仕事ぶりについて次のように語っている。

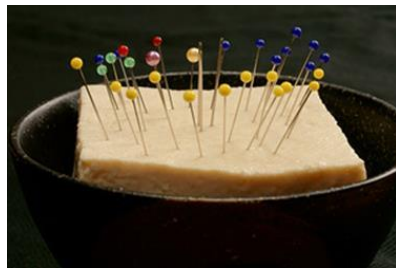
「労働の考え方がまったく違うのです。ユダヤ・キリスト教的視点からみると、労働とは人間が神との接触を失ったために額に汗して自らのパンを稼がねばならぬという一種の『罰』なのです。ところが日本では逆に、**労働を通じて神との接触が成り立ち、維持され、保ちつづけられる**のですね」。

⇒日本には、包丁塚、針供養、恵比寿さん、・・がある。

料理、着物、釣り上げた魚、それは神との間によって結ばれた関係であり、決して単なる“経済”の行為とはみなさない。

日本人は働く向こう側に神様がいないと落ち着かない。

ただ**単に儲かればいい**というものではない**労働観**を持っている。



⑥日本人の人間性

日本人の最も強い印象は人間であり、その人間性。皆が社会に役立とうとする、自分の役割を果たそうとする人間性は大きな美徳である。

・『日本についてはといえば、第一印象、最も強い印象は、人間、人々です。これはかなり意味深長です。なぜならアメリカは、人間においては乏しく、けれども自然の富に溢れた大陸ですが、日本は自然の富は乏しく、反対に**人間性において非常に豊か**です。**人々がつねに役に立とうとしている**感じを与える、その人たちの社会的地位がどれほど慎ましいものであっても、社会全体が必要としている役割を充たそうとする、それでいてまったく寛いだ感じでそれを行うという人間性なのです。(P136)

・『十八世紀に石田梅岩が創始した心学運動は、生きている現実、自己を表現することだけを求める現実を映し出しています。その現実とは、階級や環境がどうであれ、それぞれの個人が自分を尊厳の中心、意味の中心、自発性の中心であると感じている、まだ開かれた精神をもった人間性という現実です。日本では**一人一人が熱心に、自分のつとめをよく果たそうとしていることに心を打たれます**。この快活な善意は、自国の社会的道徳的風土と比べて、日本民族の大きな美徳に見えます。』(PP.36-37)

⑦ 日本文明の特徴

日本は、文明から文明を掬う(すくう)文明を持っている。

・『日本文化は、東洋に対しても、西洋に対しても、一線を画しています。遠い過去に、日本はアジアから多くのものを受け取りました。もっと後になると、日本はヨーロッパから、さらに最近では、アメリカ合衆国から、多くのものを受け取りました。けれども、それらをすべて**入念に濾過し、その最上の部分だけを上手に同化した**ので、現在まで**日本文化はその独自性を失っていません**。』(P40)

・『日本は多くの影響を受けてきました。とくに中国と朝鮮からの影響、ついでヨーロッパと北アメリカからの影響です。けれども、日本が私に驚異的に思われるのは、日本はそれらを極めてよく同化したために、そこから別のものを作り出したことです。**日本の特殊性は、他所から受け入れた要素を洗練し、それをつねに何かしら独自のものにしてゆく力を具えていた**のです。』(P147)

日本への期待

私が日本に願いうること、そして期待しうることのすべては、この（西洋の）手本（それは事実、西洋以外の世界にこれほど受け容れられてきました）に対して、日本人が過去に示したのと同じ独創性を保ちうることです。この独創性によって、日本人は私たちを豊かにしてくれることができます。

論点

- 日本人は“日本人らしく”生きる時に輝きを放つ。
- 「自分たちは何者か？」知らずしてグローバルは語れない。
(2015年5月9日の常盤塾より)

- ① 縄文土器に見る日本の根源
- ② 言語から道具に見る主体の「求心」性
- ③ 美術、料理に見る「混ぜ合わさない」文化
- ④ 日本精神を構成する「遊び」への嗜好
- ⑤ 日本人の労働観：人間と自然のコミュニケーションの一形態
- ⑥ 日本人の人間性：社会に役立つ、自分の役割を果たす
- ⑦ 日本文明の特徴：他文明を洗練し、独自のものにする

⇒こうした“日本人らしさ”を、どう経営に生かしていくか？

たたかれ台

①欧米のやり方をそのまま受け入れるのではなく、日本的な見地、日本で通用させるための工夫を加えてみる。

⇒欧米流の定量的な論理構成において、測れるものに落とし込んだ際に欠落してしまう定性的、質的な情報を拾い上げる。

②日本人の人間性の特徴である“人の役に立つ”ことを徹底的に突き詰める。

③遊び心を追求し、遊芸の域まで高める。

④多様性を浮世絵的にしてみる。

⇒多様な人をごちゃませにするのが、西洋画のグラデーションが掛かった状態。浮世絵的に、グループ内は均質的な人物を揃える一方、グループ間は異質にして全体で多様にしてみる。

大村智氏の言葉(1)

「大村智の美術つれづれ」(月刊美術)より

私の両親は、子どもであっても『**自分の役割はしっかり果たしなさい**』という点で徹底した人達でした、それ以外は、それぞれの自主性を尊重してくれていました。

この公募展を成功させることができた原動力の一因には、「**どうしたら人のためになれるか**」を常に考えている私の生き方の根本姿勢があるからと思っています。いかに世の中のためになるか、どうしたら人に喜んでもらえ、意義あることを行えるか。そういう発想だからこそ多くの方々の協力がいただけるし、物事を推進させてもいけるのです。

もう一つには、私のポリシーの「**遊び心**」を大切に、ということがあります。歴史に残るような素晴らしい功績を残す人は、必ずそれを持っているものです。戦国時代の武将が、合戦中の戦陣で茶を点てた…これなど「遊び心」の最たるもので、それが現代まで続く茶道となり、日本文化の極致として結実している。

要するに「遊び心」とは、**独自の美学のもとで本来の目的とは異なること、人とは違うことを行いそれを愛で、新たな文化として歴史に連なっていくこと**といえます。。

大村智氏の言葉(2)

山に登り川で遊び、土をいじり虫を捕り、木や草花を眺めて季節の移り変わりをを感じる…。とにかくわんぱくで、自然にとけこんで暮らしていました。当時は漠然と家業を継ぐつもりでいたから学問なんて全く興味なし。…しかし今思えば、学問はしなくてもそれ以上のものを**豊かな自然から学んでいた**のですね。

常に考えていなければいけないことは、『自然は相対的なもの、様々な要素が絡み合っただけで成り立つ複雑かつ広がりのあるものである』ということです。どんな学究においても、**自然の大きな繋がりのもとで考えなければ正しい方向に向かっ**ていけません。

私は、**何かに感動する心はおしなべて自然と触れ合うことから生まれてくる**、と経験から確信していますが、絵を描くことでより深い、人並み以上の感動を得ることができたように思います。

また、その**感動こそは、人が生きていく上で何より大切なもの**だとも私は考えています。文化勲章を受章された奈良女子大学の数学教授である岡潔先生も、「人間にとって一番大切なものは情緒だ」とおっしゃっていました。数学者でさえそうなので、美術にたずさわる者ならなにをかいわんや、です。**自然が何より素晴らしいのは、その最も大切なものを育ててくれることに尽きる**のではないのでしょうか。

大村智氏の言葉(3)

研究でも美術でも、そこに**独創性、オリジナリティ**があってこそ、人を感動させることができるし、広く考えれば人類の文化に貢献することになるわけです。

若い作家達に苦言を呈したい。「**基礎を大切に**」ということです。最近の作家は、非常に発想が柔軟だし、方法論も実に個性的でおもしろい…。けれども最終的には、絵画でいえばデッサンなどの修練、すなわち基礎をしっかりと積んだ人にはかなわないだろうと、私は考えるのです。

ただし、個性といってもただ人と違うことをやればいい、というものではありません。この点は、間違えてはいけません。**観る人の心を揺さぶるような、制作した人間の魂が伝わってくる、そういう作品を創り出せるようにならなければいけない**のです。

特に島岡達三先生の**縄文象嵌**の技法を何度も繰り返し続けられる、技術云々といった次元では片付けられない奥の深さを追求する姿勢は、感服して止みません

考えてみれば、私はこれまでいつも夢を描いて生きてきたように思います。**夢があるから希望が持てる。希望が持てるから生きる力になる。その力が強ければ、不思議なことに、いつの間にか実現していくもの**なのです。